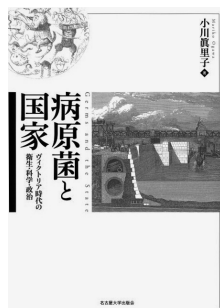


書 評

小川眞里子著『病原菌と国家
——ヴィクトリア時代の衛生・科学・政治』
(名古屋大学出版会、2016)



鈴木 晃仁

疾病は、人間の文化と社会の根本に深い影響を与えてきた。ことに、19世紀から20世紀にかけて、コレラ、梅毒、結核、精神疾患などの疾病に対する公衆衛生が、世界各国の文化と社会に深い影響を与えた。これらの疾病を軸にして、ヨーロッパとアメリカ、そしてその影響を受けることを選んだ日本などの国家において、大きな意味を持つ場が作られた。これは、それぞれの疾患がより多くの死者や患者を出したかという数字上の問題よりも、そこに与えられた意味の問題であった。いかなるメカニズムで罹患が広まるのか、どのような行政的・社会的な仕組みでそれぞれの疾病に対応すべきなのか、それを通じて社会の何が守られるのか、といった根本的な議論が、世界各国で進行し、それぞれの国の議論が相互に影響を与える国際的な実践と言説の空間になっていた。そのなかで、もっとも大きな影響を与えた国家がイギリスであった。小川眞里子による本書は、このイギリスの公衆衛生、ことにコレラを中心とした公衆衛生の歴史を、詳細で水準が高いリサーチに基づいて記したものである。

小川の書物は、日本とイギリスの二つの学術の世界をすり合わせるという、ユニークで興味深い仕掛けを持っている。すなわち、書物のある側面は日本の読者に向けて、別の側面はイギリスの読者に向けて書かれている。書物全体の枠組みとしては、日本の研究者や学術的な読者が念頭に置かれている。小川が示している研究の状況と、それを改善する仕方は、日本の研究者からみたときの状況であり、学術を進展させる方法である。一方で、内部の具体的な議論はイギリスの研究者に対応しており、*Bulletin of the History of Medicine* や *Ambix* といった国際的な医学史の一流学術誌に掲

載された英語論文から組み込まれている。すなわち、全体としては日本の学術的な読者に向かって構成され、個々の部分はイギリスの研究者にとって新しい内容の議論を部品としている。このような形で、日本仕様と英語仕様を組み合わせた書物は、現在の日本の人文社会科学の世界が直面しているグローバルな発信とローカルな深化をどのように共存させるのかという問いに答える一つの形であろう。特に、イギリスの文学、社会、科学、医学などを主題として扱った仕事を日本語で発表するときに、英語圏の研究者に向かって語り掛けるのか、日本語圏の研究者や学術的な読者に対して発信するのかという難しい問題を、一つの仕方で解決している。

このような構成を取ったことは、本書に長所と短所の双方を与えた。長所としては、著者が英語圏で行った水準が高い研究に日本語で触れることができることが大きい。小川の研究は、イギリスの議会文書という行政関連の基本的な史料、イギリスの医学書や医学雑誌といった医学史の基本的な史料はもちろん、イギリスとドイツのさまざまな文書館などの史料へのリサーチを含み、水準が高い研究が使うべき史料の範例を提示している。ことに、本書第六章「コレラとスエズ運河」と第七章「病原菌と帝国」は、エジプトのコレラ流行をめぐる国際的な対立と葛藤を描いている優れた章であるが、この章の基盤となったのは、著者の小川がイギリスの議会文書から初めて発見した史料である。この新発見の史料を詳細・着実に分析して、エジプトのコレラに関するイギリスの解釈が、どのような影響をイギリスと世界に与えたかを明らかにすることができた。イギリスに関する新資料の発見と新しい解釈の提示という歴史学の一つの範例を、英語だけでなく日本語でも読むことができる世界を本書は示している。ことに、英語の研究文献を読み進めるのがまだ難しい学部生へのアサインメントとして非常に優れている。

付言すると、このエジプトのコレラは、世界的な流行のうち5番目の流行と呼ばれているものである。イギリス、フランス、アメリカの本国にとっては大きな流行ではなかったが、ロシア、日本、イタリアといった国家はもちろん、細菌学の先進国であったドイツですら、いまだにコレラが大被害を出していた。ロシアや日本ではコレラは半ば常在化して、それぞれ数十万人の死者が出ていた。1884年にイタリアのナポリを襲ったコレラ

は7,000人の死者を、1892年のドイツのハンブルクのコレラの流行では約8,000人の死者を出している。この時期に、日本では北里柴三郎が、ドイツでは本書でも触れられているパッテンコーファーらが、それぞれ興味深い実験をしており、小川の書物や論文は、5番目の流行を契機とした細菌学と公衆衛生の国際比較研究の重要な布石になるだろう。

また、もう一つの長所として、第四章「病原菌理論の時代」のような、現代の思想と運動と連結させた科学史の分析を示したことが掲げられる。第四章は、進化論という生物学的な議論と、イギリスでは1876年に法律化された動物の生体解剖反対という倫理的な立場が、どのように19世紀の病原体研究に関与したかを分析したものである。進化論と動物の権利の問題は、小川自身が「終章」で示唆するように、現在においても根本的な問題の一つであり、19世紀を現在とつなぐ可能性を鮮やかに示した章となっている。

一方で、書物全体が日本の学術の世界に向けて書かれていることは、この書物においては、短所として目立つ結果になってしまっている。もちろん、日本の学者や学術的な書物の読者の集団においては、19世紀イギリスの公衆衛生、衛生学、細菌学の歴史の研究の最新の状況にある程度把握している研究者がごく少ないことは事実であるし、日本の読者に日本語で書く場合には、そのような配慮をするべきである。しかし、イギリスの医学史における衛生研究について一定の知識を持っている研究者からすると、本書の記述には違和感を持つことが多い。たとえば、冒頭の序章で、この書物が解こうとしている歴史記述的な問題を指摘する場面で、「医学史の一般史に対するコミットの欠落、イギリス19世紀後半の医学史の空白」(6ページ)という時に、それは日本で行われているイギリスに関する医学史における欠落であり空白であるだろうという意識を評者は強く持つ。イギリスにおいては、過去30年ほどの期間にわたって、巨大な規模の研究助成と、歴史の世界の最先端を走る史料の利用性を背景にして、そしてフーコー、ラトウール、新左翼、フェミニズム、歴史人口学など、当時の多様な思想的・方法的なイノヴェーションを用いて、医学史研究は劇的に進歩した。¹ その状況において、一般史と接続していないだとか、19世紀後半が研究されていないという指摘は、イギリスの現状にはまったく

合っていないし、また、日本の医学史研究も、全体として言えば同じ方向に向かって、状況はかなり改善している。²また、医学史研究でイギリスの微生物学が研究されていないという指摘も、どの地域で何が問題だと批判しようとしているのか混乱している。その論拠の一つとして挙げられているポール・ド・クライフ『微生物の狩人』の12本の章が取り上げている人物は、ドイツ3人、フランス3人、イギリス2人、アメリカ2人、イタリア2人、オランダ1人であり、あえて取り上げるほどイギリスが少ないとは評者は思わない。

小川の手書物が示していることは、一つはイギリス向けのゲームをすることの成功であり、もう一つは、それを含めた成果を日本にむけて発信するゲームの難しさである。イギリスに関する主題の成果を、イギリスの学界で通用する水準や仕方ですに問うことは、小川自身を含めた多くの研究者が示すように、成功例が積み上げられている。この方向の進展は、日本のイギリス関係の学会が継続して重視するべきであろう。それと同時に、そのような成果を、どうやって日本に根付かせるのかという問題が、まだ応えられていない。人文社会科学は、それぞれのローカルな地域に根付いてこそ現代世界で意味がある中で、どのようにイギリス仕込みの学問を日本語で発信するのか。この雑誌の読者の多くが経験しており、それを解こうとしている問題であるだろう。その中で、小川の手書物は、研究者たちに一つの里程碑を与える業績になり、同時に、そこからどのように進めばいいのかを議論するときの重要な素材になるだろう。

注

- 1 ことに、日本の研究者向けにいうと、ウェブ上でオリジナルの史料を検索し通読することができるシステムは、大きな意味を持っている。たとえば、ロンドンのウェルカム図書館は、医療と疾病関連のさまざまな史料や画像を公開し、19世紀から20世紀のロンドンの医療衛生官 Medical Officer of Health の全報告や、19世紀のいくつかの精神病院の史料、ことにすべての症例誌の画像閲覧、あるいは19世紀の性や調理などに関する手書の閲覧など、数多くの史料を利用できるようにしている。<http://wellcomelibrary.org/collections/>

- 2 拙稿「医学史の過去・現在・未来」『科学史研究』no.269, 2014: 27-35.

——慶應義塾大学教授